

終助詞「ね」の動的機能

川 岸 克 己

The Dynamic Function of the Sentence-Final Particle "ne"

Katsumi KAWAGISHI

要 旨

終助詞「ね」は自己（話し手）と非自己（聞き手）とのコミュニケーションを通じてどのような目的を成し遂げようとしているのか、について、行動生物学的な視点を参考にしつつ、その本質的な機能の解明を試みた。その結果、終助詞「ね」は非自己の領域に自己の情報を仮想的に「自己拡張」させ、自己の生存と存続の可能性を高めることを企図する動的な機能を有すると結論づけた。

キーワード：終助詞「ね」、既知未知、自己非自己、自己拡張、動的機能

1. 背 景

1.1 言語の目的

わたしたちが言語を使用する目的は何か。わたしたちが相互にコミュニケーションをとるためであると措定すると、ただちに、では、なぜ、わたしたちはコミュニケーションをとるのだろうか、と新たな問いが生まれる。言語がコミュニケーションをとるための装置であることに大きな異論はないだろうが、もう一方の「コミュニケーションをとるのはなぜか？」という問いについては、少々不意を突かれた印象をもたれるのではないか。言語学や日本語学において正面から扱うことがまれな問いであったからである。だからといって、言語の真の理解のために、この根本的な問題を放置して良いわけではない。それがこの論文の背景にある。

1.2 情報のなわ張り理論

そうした問題意識を有する研究に、神尾昭雄の『情報のなわ張り理論』（1990）がある。言語現象の記述を目的とせず、その先にある「言語とは何か、コミュニケーションとは何か」との問いに、独自の視点から取り組んだ画期的な研究であり理論である。『情報のなわ張り理論』の「まえがき」で、言語が使用される目的に関する考察を、一般的認知能力にまで還元させ、以下のように説明する。

筆者の語用論についての関心は、基本的には一般的認知能力がどのように言語または言語使用に反映しているか、あるいは言語または言語使用がどのように一般的認知能力によって司られているか、という点に関する興味に発している。したがって、本書は、情報のなわ張りの理論という一理論の研究を通して、一般的認知能力と言語ないしは言語使用との関わりを探ろうとした試みである。(神尾昭雄『情報のなわ張り理論』まえがき)

私たちの「一般的な認知能力」がどのように言語に影響を与えているのか、あるいは逆に、言語は一般認知能力によってどのように構成されているのかについて考えたのがこの理論である。この一般的認知能力と言語使用との関係について分析した「なわ張り」という独特の術語は、生物学の視点から生まれた。同書には、「<なわ張り>という概念は、行動生物学 (ethology) において最も深く研究されている。その適用は広範囲に及ぶが、基本的には、なわ張りとはある種の動物がその勢力範囲とみなす空間を言う。」(p.4) とあり、また、「本書における情報のなわ張りの概念が行動生物学的ななわ張りの概念に根ざすものであり、したがって生物学的な基盤を持つものであることはおおよそ察せられたであろう。」(p.5) とあるように、情報のなわ張り理論は、生物学の考え方を基盤にして、言語現象の意味を分析していく方法でもあった。

この理論は、言語によってやりとりされる文を「情報」として捉え、文とその情報との関係を以下のように一次元の心理的距離として規定した。

話し手または聞き手と文の表わす情報との間に一次元の心理的距離が成り立つものとする。この距離は<近>および<遠>の2つの目盛によって測定される。(神尾1990, p.21)

つまり、言語は、話し手と聞き手とが情報を<近>すなわち自分の領域の情報とするか、あるいは<遠>すなわち自分以外の領域の情報とするか、によって文を構成するものであるとする考え方である。言い換えれば、自分に近いか自分から遠いかという空間的身体的な概念である。これが行動生物学的なアプローチであり、一般的な認知能力であるとするゆえんである。

これを図にまとめたものが以下である。言語によって表された情報は、話し手の<近>である「なわ張り」に帰属するか、あるいは聞き手の<遠>である「なわ張り」に帰属するか、によって4つに分けられる。

図表 1 (神尾1990, p.32)

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手の なわ張り	外	A 直接形	D 間接形
	内	B 直接ね形	C 間接ね形

1.3 終助詞「ね」

ここで注目したいのは、「ね」である。神尾のなわ張り理論を端的に表す図表に終助詞「ね」があることから、終助詞「ね」が同理論の根幹的な部分に深く関与していることがわかる。同理論において重要な終助詞「ね」とは何か。

「ね」は、現在の発話内容に関して、話し手の持っている情報と聞き手の持っている情報とが同一であることを示す必須の標識である。(神尾1990, p.62)

神尾(1990)は、終助詞「ね」は、話し手と聞き手の持っているそれぞれの情報が同一であることを示す必須の標識である、と定義したうえで、さらに終助詞「ね」は「同一の認知状態」を示す<協応的態度>であると定義した。

「ね」は話し手の聞き手に対する<協応的態度>を表す標識である。<協応的態度>とは、与えられた情報に関して話し手が聞き手に同一の認知状態を持つことを積極的に求める態度である。(神尾1990, p.71)

終助詞「ね」は、同一の認知状態を「積極的に求める」ものであるとするこの定義は、本論の今後の展開の中で重要な意味を持つてくるが、この<協応的態度>を有する終助詞「ね」が重要な理由は、それがコミュニケーションの成立に関わるゆえであると同理論は説明する。

話し手が発話によって自己の内的世界と聞き手の内的世界とに同一の情報を生ぜしめることが出来れば、情報伝達は成功である。すなわち、コミュニケーションの成立とは、発話の結果、話し手および聞き手の内的世界がその発話に関して同一の状態となることにある。(神尾1990, p.61)

コミュニケーションの成立と情報伝達とを同一視する視点に立てば、話し手と聞き手の内的世界が「同一の状態」になることをコミュニケーションの要件とするというのは理解できる。しかし、情報伝達がコミュニケーションかといえば、そこはさらなる考察が必要ではある。

ともあれ、終助詞「ね」が重要な意味を持つのは、話し手と聞き手が「同一の情報」を共有し、かつそれが「同一の状態」であることを「積極的に求める」ものであり、それこそがコミュニケーションを成立させる要件であると主張するのが、この情報のなわ張り理論である。

すなわち、コミュニケーションをとる目的は、終助詞「ね」に代表されるように、その発話によって、話し手と聞き手の内的な世界を同一の状態にすること、にある。裏を返すと、内的な世界が同一の状態にならない場合は、コミュニケーションが成立しないということになる。果たしてそれが妥当なのか。あるいは、それを妥当なものにするには、さらにどのような理解が必要なのか。

2. 問 題

2.1 「共有情報説」と「内部確認行為説」

北野浩章「日本語の終助詞『ね』の持つ基本的な機能について」(1993)は、これまでの終助詞「ね」に関する研究の流れを簡潔に紹介している。まず、終助詞「ね」については、「共有情報説」と「内部確認行為説」とが有力な研究であるとして、大きく二つに分けている。

ひとつめの「共有情報説」は、終助詞「ね」が話し手にとって聞き手も同じ知識を持っている場合に用いられ、かつ、話し手と聞き手とが同じ知識で一致していると認識される場合に用いら

れる、とみる説である。さらに、その場合の終助詞「ね」は、話し手の態度によって二つに分けられ、自分の知識を聞き手に持ちかける場合は「同意」となり、自分の不確かな知識をその妥当性について聞き手に持ちかける場合は「確認」となる、とする。

北野（1993）は、共有情報説として説明される終助詞「ね」には、二つの側面があるとし、ひとつは「共有情報であることを示す」という面であり、もうひとつは「聞き手に対する要求が伴う」という面であるとする。つまり、「共有情報説」が唱えるところの終助詞「ね」は、「共有情報」と「聞き手に対する要求」が中心的な概念であると言える。

ふたつめの「内部確認行為説」は、話し手の発話と話し手自身の知識や記憶とを照合させて、その両者の間に食い違いがないことを確認するのが、終助詞「ね」である、とする説である。

蓮沼昭子（1988）の「発話時において自分が述べようとしていることと、他の何らかのよりどころとなるものとの間に、食い違いがないということを、話し手の話の場に持ち出し確認する。」(p.95)などを引用しながら、「共有情報説」とは異なるもうひとつの用法として「内部確認行為説」があるとする。

「内部確認行為説」は、話し手が聞き手に対して、話し手自身の知識や記憶が自分の発話と整合性がとれていることを、聞き手に伝えて確認する、というものであり、少々奇妙な行為であるが、その例としてあげられているもののひとつが以下の例である。

A：理想の女性は？

B：やっぱり、しとやかで優しい女ですね。

「やっぱり、しとやかで優しい女ですね」が「共有情報であるはずがない」(p.77)とするがゆえに、終助詞「ね」のもうひとつの説として、自分の発話とそのよりどころとなるものとの間に食い違いがないことを確認する「内部確認行為説」を取り上げているわけである。

北野（1993）は、上記のように、終助詞「ね」には、「共有情報説」と「内部確認行為説」とがあるとしたうえで、自らは、「この『発話確認』によって、様々な『ね』の基本的な機能を、『発話が妥当かどうか、聞き手に確認する』ことであると規定し、様々な現象がこの基本的な機能によって説明される」(p.87)とし、終助詞「ね」は「発話確認」であると定義した。

以上、情報のなわ張り理論では、ふたつの要素「同一の認知状態」と「積極的に求める」を終助詞「ね」に認めた。共有情報説では、「共有情報であることを示す」と「聞き手に対する要求が伴う」が終助詞「ね」であるとし、内部行為確認説では、「発話と認識に食い違いがない」と「聞き手に確認する」が終助詞「ね」であるとした。そして、発話確認説では、「発話が妥当かどうか」と「聞き手に確認する」とが、終助詞「ね」の意味であるとした。これらを整理すると以下のようになる。

図表2

情報のなわ張り理論	同一の認知状態	積極的に求める
共有情報説	共有情報であることを示す	聞き手に対する要求が伴う
内部確認行為説	発話と認識に食い違いがない	聞き手に確認する
発話確認説	発話が妥当かどうか	聞き手に確認する

それぞれ着眼点は異なるが、終助詞「ね」は、まず話し手の認識として話し手と聞き手との間に共有の認識があるか、あるいは話し手の内部に整合性のとれた認識があるか、ということ在意

味し、次に、話し手に確認する、あるいはそれを要求する意味を持つ、という理解で一致しているとみてよい。

2.2 動的であること

しかしながら、ここまで見てきた説明、すなわち聞き手に対する要求や確認は、いわば終助詞「ね」が機能することによって発現した現象にすぎない。本論の冒頭で述べた行動生理学的に言語を理解しようとするならば、その現象として捉えられた要求や確認といった行為のさきに、終助詞「ね」がもつ本質すなわち目的を見据えなければならない。終助詞「ね」は、共有、要求、確認を示すと記述するだけでは、終助詞「ね」の本質としての終助詞「ね」の目的がいったい何なのかについて明らかにすることができない。話し手にとって既知の情報を、しかも聞き手にとっても既知の情報であるものを、なぜ聞き手に対してそれが共通の認識であることを改めて確認し、要求するのか。その行為自体の意味が説明できない。これを説明するには、これらの理解のさらに先にある理由を考察することが必要である。

さきの北野（1993）のなかでも、このことについて触れている箇所がある。

話し手が聞き手との共有情報を発話することにどんな意味があるのだろうか。素朴に考えれば、伝達価値はゼロである。これはかなり根本的な問題だと思われるが、「ね」を単なる共有情報のマーカーととらえるのでは、この疑問に答えられない。（p 79）

「単なる共有情報のマーカー」とは、すなわちそれが現象であり、その先にそのマーカーが示す本質が存在することを示唆している。ただし、ここで「共有情報を発話することにどんな意味があるのだろうか」と投げかけられた問いに対して、残念ながらそのあと考察された様子は見受けられなかった。ともあれ、終助詞「ね」には、話し手の認識を聞き手に対して、同意だったり確認だったりという形で要求することによって、何かを達成しようとする目的があるにちがいない。

2.3 問題提起

文が既知情報と未知情報とを助詞によって接続させて、新しい情報を獲得しようとするのはよく理解できる。しかし、話し手の既知情報と聞き手の既知情報を接続させることに何の意味があるのか。既知情報に未知情報を接続させることによって新しい知識を得ることもなく、既知情報に既知情報を接続させるところに、どんな動的な理由が存在するのだろうか。

ここまで先行文献にならって「話し手」や「聞き手」といった語を使用してきたが、終助詞「ね」の目的は何かといった問いをたてようとするとき、言語の現象の記述ではなく、その目的を考察するのであれば、情報のなわ張り理論と同様の行動生物学的な基盤に立つ必要がある。生物がその行為をするには何らかの目的がある。その目的を解明するためには、生物の生存としての視点が必要である。生物としての視点に立てば、身体的に自己領域か自己領域ではないかの区別が重要になってくる。そこで、これまで「話し手」および「話し手の情報」とされてきたものは「自己（領域）」とし、「聞き手」および「聞き手の情報」とされてきたものは「非自己（領域）」と理解し直すのがふさわしい。

そのうえで、本論が提起する問題提起は、以下の通りである。

問題：なぜ、自己は、終助詞「ね」によって、自己の情報を非自己と共有し、働きかけようとするのか。

「要求する」や「確認する」といった行為は、情報の共有を非自己に働きかけようとするものであり、共有しようとする情報は自己の情報に他ならない。自己の情報を非自己と共有しようとする働きかけるのは、なぜなのか。

3. 仮 説

3.1 現象と本質

これまでの先行研究で得られてきた詳細な知見は、終助詞「ね」の振る舞いに関する現象を、整合性をもって論理的に説明してきた。しかし、そこには、自己の情報を非自己と共有しようとする事、そして、それを非自己に働きかけようとする現象の向こうにある本質についての考察がなかった。終助詞「ね」として発現される現象を、情報のなわ張り理論の視点から、生物の行動として生きるために必要な何かに起因すると考えることが、終助詞「ね」の本質について考察することに他ならない。

3.2 仮説

そうした視点から、先の問題提起「なぜ、自己は、終助詞「ね」によって、自己の情報を非自己と共有し、働きかけようとするのか」に対する仮説をこれまでの先行研究の知見を参考にしながら、以下のように提示する。

仮説：自己は、終助詞「ね」によって、自己を非自己の領域に「自己拡張」させるためであり、それは、自己の生存と存続の可能性を高めるためである。

4. 検 証

4.1 既知未知

先に紹介したように、これまでの研究は、「共有情報説」と「内部確認行為説」とに大別される。しかし、これらの具体例としてあげられているものを分析してみると、両者に大きな違いはなく、むしろ、いずれも、自己あるいは非自己の情報が既知であることを示している。

たとえば、共有情報説としてあげられている以下の例は、いずれも、終助詞「ね」を用いて発話する自己にとって既知の情報で、非自己にとっても既知の情報である。

- ・今日は良い天気ですね。(同意要求)
- ・ええ、そうですね。(同意) (大曾1986, p.91)

自己が「良い天気」だと思っている既知の情報を、非自己も同じく「良い天気だ」と思っていることを前提として発話されており、実際非自己にとっても既知の情報である。それを受けた非自己の返答「そうですね」も、「良い天気」であることは非自己も自己と同様に受容した情報、

つまり既知の情報として受け取ったことの表明である。

- ・彼は確か岡山の出身だったね。(確認) (益岡・田窪1989, p.48)

「岡山の出身だったね」も、自己が未知の情報を確認する場合にはこのような発話はされない。むしろ、自己は既知の情報として保有しており、それを当然既知の情報として保有する非自己に発する場合にこのような表現がなされる。

また、北野(1993)において、蓮沼(1988)の例を引用して内部確認行為説として挙げられている以下の例は、終助詞「ね」が、自己と非自己との間に情報が共有されていない、つまり反例として挙げられた。しかし、これも詳細に分析すれば、自己も非自己もともに既知の情報にすぎない。

- ・理想の女性は？
やっぱり、しとやかで優しい女性ですね。

「やっぱり」があることから分かるように、この発話より前に、すでに「優しい女」が良いとする情報が何らかの形で提示されており、両者にとって、「しとやかで優しい女」が良いという情報は既知の情報として共有されている。

- ・お住まいはどちらですか？
*神戸ですね。

さらに、同じく北野(1993)で、「お住まいはどちらですか？」との問いに対して、「神戸ですね」は、従来の終助詞「ね」の説明、つまり、自己と非自己が既知情報として共有しているという理解では説明しきれない、とされているが、これもまた、この発話より前に、すでに会話の中で、たとえば非自己の居住地が、大阪、京都、神戸のいずれかだったと自己が記憶している、あるいは前提とされているという状況において、改めて、「お住まいはどちらですか？」と自己が尋ねた場合、その文脈を踏まえて、非自己は「神戸ですね」と返答することは可能だし、不自然ではない。

つまり、共有情報説も、内部確認行為説も、終助詞「ね」は自己と非自己の双方が情報を既知の情報として捉えている点において共通している。

4.2 終助詞「よ」と「ね」の比較

終助詞「よ」と終助詞「ね」の比較によっても、終助詞「ね」が既知情報を表現するものであることが説明できる。

- ・明日は晴れるよ。
- ・明日は晴れるね。

「晴れるよ」において、自己は何らかの手段によって明日「晴れる」という情報を得ている。

それに対して非自己は「晴れる」という情報を得ていない、より正確に言えば、自己が非自己にその情報を得ていないと想定している状態である。つまり、自己にとっては既知の情報だが、非自己にとっては未知の情報である。一方、「晴れるね」は、自己がすでに得ている「晴れる」という情報を、非自己も同様に得ている、あるいは、自己が非自己もその情報を同様に得ていると想定している状態である。つまり、自己にとっても、非自己にとっても既知の情報である。これを表でまとめると、

図表 3

	自己 (話し手)	非自己 (聞き手)
よ	既知	未知
ね	既知	既知

となる。終助詞「ね」は、自己にとっても、非自己にとっても、既知の情報であることを示す終助詞である。終助詞「ね」と「よ」は、ともに頻繁に使用される終助詞であることから、既知情報を有しているか否かという分節基準は重要なものとみなすのが自然である。

しかし、この反例として、今村和宏「終助詞『よ』『ね』の『語りかけタイプ』と体の動き」(2011)では、以下の例を挙げている。

A：あの人の考え方、変ですね。

B：変ですよ！ まったく理解できません。(今村2011, p.37)

この用例に対して、今村(2011)は、以下のように説明する。

Bは明らかにAに同意している。判断が一致し、意見を共有しているのに、「ね」でなく「よ」を使っている。そのうえ、同意の気持ちが強ければ強いほど、「変ですね！」より、「変ですよ！」を使って聞き手に語りかけるのが自然に感じられる。(今村2011, p.37)

この例は、非自己が同意していないから、従来の終助詞「ね」に対する説明の反例であるとしてあげられている。しかし、この用例の文脈は、Aが知っている事実以上の重大な事実をBが情報として持っているときに使用される。つまり、Aは「あの人」に関して「変」だと判断するに足る経験を含めた情報を有しているが、Bも「あの人」を「変」だと判断する情報を持っている。しかも、Bの情報は、Aが「変」だと判断する情報以上のものである場合に、Bは「変ですよ！」と応じることが自然である。Aが知っている情報以上の情報を有しているから、それを表現しているのである。となると、確かに、同意というよりは、Bの知識の方が、Aを凌駕しているのだから、同意ではなく、教示であるが、「あの人」が「変」だという情報については、ともに既知の情報であることには変わりなく、ともに既知の情報を有していると理解するのが妥当である。

4.3 終助詞「か」「ね」「よ」の鼎立構造

終助詞「よ」と「ね」を比較してみたが、それに終助詞「か」を加えて、「よ」「ね」「か」

の鼎立情報構造として、既知か否かの基準で分析すると、整合性のとれた終助詞の構造と、終助詞「ね」のもつ特異性を見て取ることができる。

- ・明日は晴れますよ。
- ・明日は晴れますね。
- ・明日は晴れますか。

「よ」は、自己にとっては既知情報、非自己にとっては未知情報であって、その結果、「教示」という形で使用される。「ね」は、自己にとって既知情報、非自己にとっても既知情報であるから、「共有」という形で使用される。そして、「か」は、自己にとって未知情報、非自己にとっては既知情報である。自己は未知であるからこそ発問するわけであるし、それを受ける非自己は、その問いに対する答えを持っていると自己によって想定される場合であって、となると、非自己にとってその問いに対する情報は既知情報であるといえる。これを表にまとめると以下の通りとなり、終助詞「よ」と「ね」の比較よりもより整合性のとれたものとなる。

図表 4

	話し手	聞き手	意味
よ	既知	未知	教示
ね	既知	既知	共有
か	未知	既知	質問

終助詞「よ」と「か」は、既知と未知の関係が自己と非自己において逆の関係になっているが、既知の情報をもとにして未知の情報のやりとりをするものであるという点においては共通である。終助詞「よ」や「か」によって扱われている未知の情報は、現時点において自己が有していない情報であるから、有意義な価値を有するだろう。それに対して「ね」は、未知の情報のやりとりではなく、既知情報の共有である。両者にとって既知の情報を、自己が非自己に発しても、双方にとって何も新しい情報をもたらさず、いったいどのような意味があるのか、謎である。しかし、だからこそ、そこに行動生物学的な視点から終助詞「ね」を解釈する意味がある。自己は、なぜ、わざわざ非自己との間に既知の情報を共有するのか。

4.4 排他的な知識管理

先行文献にならって、終助詞「ね」は、情報の「共有」を意図すると表現してきたが、正確には「共有」ではない。共有というのは、複数の主体が相互に自らの意思をもって、ある情報を認知することだろう。しかし、終助詞「ね」における「共有」は、あくまで自己による情報の獲得である。非自己は直接には関与しない。自己が提供してきた情報を、とくに拒絶することなく受容すること、それが結果的に、非自己が自己の情報を「共有」しているかのように見える現象なだけである。

加藤重広「文末助詞『ね』『よ』の談話構成機能」(2011)は、この問題を談話構成機能として捉え直し、終助詞「ね」の理解に新たな視点を加えた。

「よ」は話題になっている命題内容について、排他的な知識管理する準備があることを示す

マーカだと見ることができる。これに対して「ね」は排他的な知識管理をしないことを示すマーカだと言えるだろう。(加藤2011, p.43)

この「排他的な知識管理」は、「話題になっている知識や情報に発信者のみが優先的にアクセスできる状況にある」(p.43) ことであると定義している。

- ・今日は寒いよ。
- ・今日は寒いね。
- ・今日は寒いよね。

といった3つの表現があったとする。加藤(2011)は、「今日は寒いよ。」については、ほかの人が寒いと感じるか否かは別として、自分自身にとっては寒いのだという、「寒い」という情報を優先的・独占的に管理するという意思表示が終助詞「よ」であるとする。一方の「今日は寒いね。」は、自分も寒いと感じているが、聞き手も寒いと感じていると想定し、寒いという情報を優先的・独占的に管理することを放棄すると説明する。そして、「今日は寒いよね。」は、「私は個人的に寒いと感じており、これは私個人の感覚なので独占的に管理できる知識であるが、それについて他の人は異なる判断や反論をする余地があることを認める(つまり、排他的知識管理を放棄する)用意がある。従って、排他的知識管理のもとにある『今日は寒い』ということ、不同意や反論の余地を認めながら発話する」という意味になる。」(加藤2011, p.47)と説明している。

終助詞「ね」が担うのは、自己の情報管理であり、そのための戦略として、排他的に情報を管理するか否かという手法を用いている。この場合、非自己の意思は考慮されない。つまり、自己と非自己が情報を平等に「共有」しているのではなく、自己が一方的に「管理」しているのだ、と理解すべきだということである。

4.5 「なわ張り」の概念

排他的な知識管理、そういえば、神尾(1990)の術語である「情報のなわ張り」は、これも排他的な意味合いを有しているとみなすことができる。行動生物学的な視点、すなわち、生物が行動するとき、その目的は何かと考えると、「なわ張り」という術語に象徴されるように、排他的なものにならざるを得ない。

神尾(1990)は、このあたりの事情について、魚のトゲウオや、図書館での人間の振る舞いなどを例になわ張り行動について説明している。詳細は割愛するが、「なわ張り」とは、行動生物学的に排他的な行動を取らざるを得ない生物の行動現象であるということである。神尾(1990)があえて「なわ張り」という斬新な術語を導入した真意は、まさにここにあったということができるであろう。

ところが、ここまでみてきた終助詞「ね」の理解は、自己の情報が非自己の情報としても存在するということになる。これまでの解釈では、終助詞「ね」は、なわ張り理論の根幹でありながら、排他的ではない性質を持つものになってしまう。これでは、終助詞「ね」を通じて、言語によるコミュニケーションの本質を、行動生物学的に理解しようという試みとは真逆の理解になってしまいかねない。別の見方をすれば、ここに、なわ張り理論の根幹的な要素でありながら、な

わ張り行動と真逆といった、矛盾する現象をもつ終助詞「ね」の特性と重要性が内在すると見ることができる。

4.6 「引き入れ」概念

とは言っても言語を用いたコミュニケーションによって、自己は排他的であろうとしているわけではないし、自己が非自己と敵対するために、言語によるコミュニケーションが存在するのではない。つまり、言語は、自己が非自己と敵対するためにあるのではない。むしろ逆であろう。と同時に終助詞「ね」も、自己と非自己が安易に情報を共有するためにあるのではないことを理解しなければならない。

自己が終助詞「ね」によって意図しているものについて、伊豆原英子「終助詞『よ』『よね』『ね』再考」(2003)に、示唆的な見解がある。

「よ」は、話し手の認識を伝えることで聞き手の認識に何らかの変化をもたらそうとするものであり、「よね」は話し手の認識が聞き手の認識でもあるかを確認することで共通認識領域を作り出そうとするものである。「ね」は、話し手の認識に聞き手の同意を求め、聞き手との間に共通認識領域を作りだすものである。(伊豆原2003, p.13)

このあたりについて、伊豆原(2003)で論じられた、「よ」「よね」「ね」それぞれの機能について、表に整理すると以下ようになる。

図表5

「よ」	I類	聞き手の認識に強く働きかけ、なんらかの行動を促すもの。
	II類	聞き手の認識の訂正を促すもの。
	III類	話し手の認識の受け入れを強く求めるもの。
「よね」	I類	話し手の認識の受け入れを求め、聞き手と認識を共有しようとするもの。
	II類	話し手の認識が聞き手の認識でもあるか(にもなりうるか)を聞き手に確認することで、聞き手を話し手の認識領域に取り込むもの。
「ね」	I類	話し手の認識に対して聞き手に同意を求め、話し手の認識領域に聞き手を引き込もうとするもの。
	II類	話し手が話し手自身の認識を伝え、話し手の認識領域に聞き手を引き込もうとするもの。

非自己の領域に自己との「共通認識領域」を作り出すことが終助詞「ね」の目的である。さらにいえば、自己と非自己が同じ情報を仲良く共有することが目的ではなく、自己が積極的に自己と同一の領域を非自己の領域に作り出すことが目的である。終助詞「ね」の目的は、戦略的な非自己の「引き込み」である。これは重要な指摘といえる。

そして、伊豆原(2003)は、「情報のなわ張り理論」について以下のように言及する。

「よ」も「よね」も「ね」もともに「発話によって聞き手に話し手と同一の認識を持たせる」機能をもっている。神尾(1990)の言うように、会話の目的が「話し手および聞き手の内的世界が、話題に関して同一の状態になる」ことを目指して行われるものであるならば、「よ」

「よね」「ね」に共通した談話上の機能はまさにこの点にあるのだと思われる。(p13)

「聞き手に話し手と同一の認識を持たせる」という戦略的な機能こそが、終助詞「ね」の目的であった。自己と同一の領域となった非自己の領域は、仮想的な自己の領域であり、その仮想的な自己の領域を構築することが、生きるための動的な機能なのである。

5. 結 論

本論の問題提起は、「なぜ、自己は、終助詞「ね」によって自己の情報を非自己と共有し、働きかけようとするのか。」であった。分かったことは、自己は、自己の領域にある既知情報を非自己の領域にまで拡張することによって、非自己を自己の領域に取り込もうとしているのだということだった。これを神尾の情報のなわ張り理論のように行動生物学的視点に立てば、非自己の領域に自己を拡張させる言うなれば「自己拡張」機能だと定義することができる。自己を拡張することによって、自己と同一の領域を非自己の中に仮想的に構築させることによって、自己の領域が拡大される。自己の領域が拡大されることによって、自己の生存および存続の可能性が、行動生物学的に高められる、というわけである。

これまでの終助詞「ね」の理解は、いわば静的な構造としての理解であったように思う。そこにあるのは、現象としての終助詞「ね」の記述であって、その現象の先にある本質について考え求めるきっかけが与えられることはなかった。しかし、その現象の先にある、終助詞「ね」の生存するための機能すなわち動的な機能を説明しようと試みることによって、コミュニケーションの方法としての言語、その戦略としての終助詞「ね」の本質的な動的な機能を明らかにすることができたと結論する。

6. 参 考 文 献

- 神尾昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論 言語の機能的分析』大修館書店, 1990年5月
- 北野浩章 (1993) 「日本語の終助詞『ね』の持つ基本的な機能について」『言語学研究』12, 京都大学, 1993年12月
- 蓮沼昭子 (1988) 「続・日本語ワンポイントレッスン・第2回」『言語』第17巻第6号, 1988年6月
- 大曾美恵子 (1986) 「誤用分析1『今日はいいい天気ですね。』—『はい、そうです。』」『日本語学』第5巻第9号, 1986年9月
- 益岡隆志・田窪行則 (1989) 『モダリティの文法』くろしお出版, 1989年
- 今村和宏 (2011) 「終助詞『よ』『ね』の「語りかけタイプ」と身体の動き」『言語文化』Vol.48, 一橋大学, 2011年12月
- 加藤重広 (2001) 「文末助詞『ね』『よ』の談話構成機能」『富山大学人文学部紀要』, 2001年8月
- 伊豆原英子 (2003) 「終助詞『よ』『よね』『ね』再考」『愛知学院大学教養部紀要』第51巻第2号, 愛知学院大学, 2003年12月